

信 行 要 文 ① 第七回 法華講夏期講習会 第一期

皆さん、おはようございます。

この法華講夏期講習会は、本年度から以前の形態と少し変わりまして、参加者を講頭さんをはじめ幹部の方や活動家の方とし、言うなれば各支部の代表的な方にお集まりいただくようになった次第であります。

一般の方を対象にした講習会が三期に分けて開催され、さらに青年部を対象とした講習会が一回行われます。従来は十期にわたって行われておりましたが、今回は全四期ということでありませぬ。

そのため、本日おいでになった方々は、先程も申したように各支部の代表的な方でありませぬので、支部にお帰りになりましたら、昨日と今日の講義など、総本山で勉強されたことを必ず講中の方々にお伝えしていただきたい。そして異体同心の戦いをしていっていただきたいと、このように思う次第であります。どうぞよろしくお願ひします。

さて、テキストにございますように、私は「信行要文」ということでお話をさせていただきます。

これは初め、平成十八年の講習会で「折伏要文」についてお話をさせていただきました、次の年には「功德要文」について、その次の年には「信行要文」のお話をさせていただきました。そして去年は「七万五千名大結集総会」がありましたので、夏期講習会を中止した次第であります。

今年は、テキストに載せた「信行要文」を勉強するわけですが、実は三年前の「功德要文」の時は、時間の関係でテキストの全部についてお話しすることができず、途中で終わってしまいました。また、前回の「信行要文」の折も、テキストをずいぶん残してしまいました。そのため今回は、「功德要文」と「信行要文」でお話しできなかった残りの御文について、再度、御書の系年順に並べ直し、まとめて「信行要文」ということでお話したいと思ひます。

それではテキストをお開きください。初めは『経王殿御返事』です。

経王殿御返事

先日守のまぼりざんじ暫時も身をはなさずたもち給へ。其その御本尊は正法・像法二時には習へる人だにもなし。ましてかき頭はし奉る事たえたり。師子王は前三後一と申して、ありの子を取らんとするにも、又またたけき猛ものを取らんとする時も、いきをひを出だす事はたゞ同をなじき事なり。日蓮守護たるところ処の御本尊をしたため参らせ候事も師子王にをとるべからず。経に云はく「師子奮迅しふんじんしりき之力」とは是なり。又此の曼荼羅能く能く信じさせ給ふべし。(御書六八五こ四行目)

『経王殿御返事』を頂戴した経王殿というのは、四条金吾の子供であります。四条金吾の「金吾」というのは、実は四条さんの正式な名前ではなく、正式な名前は<sup>なかつかささぶろう さ え もんのじょうより</sup>四条中務三郎左衛門尉頼基<sup>もと</sup>というのであります。金吾というのは中国の漢時代の宮門、お城の門を守る衛兵のこと、あるいは天子の警護に当たった武官のことを言うのでありまして、四条さんは幕府のなかで金吾の役をしていらっしやったので、このように呼ばれていたのであります。

四条金吾御夫妻は、子供が病気になった時に、大聖人様にその病氣<sup>へい ゆ</sup>平癒の御祈念を願われたのでした。それに対する返事が、この『経王殿御返事』であります。御祈念の便りがあったのに対して大聖人が差し出されたわけですから、御返事と言うのであります。

内容としましては、「先日下付したところの御本尊様は、大聖人が<sup>こんぼく</sup>魂魄・全生命を注いで顕されたものであるので、この御本尊<sup>たも</sup>を持つ者は必ず諸天の加護があつて、幸せの境界になる」と記されているのであります。

この御書のなかで、

「但し御信心によるべし。つるぎ<sup>けん</sup>なんども、すゝ<sup>しん</sup>まざる人のためには用ふる事なし。法華経の剣は信心の<sup>けん</sup>けなげなる人こそ用ふる事なれ。鬼に<sup>くわい</sup>かなぼうたるべし」(御書 六八五頁)

と、このように仰せられているところがあります。この御本尊様は、しっかりとお持ち申し上げることが大事でありまして、そのことをおっしゃっているわけでありまして、

また、同様のことは、『日女御前御返事』のなかにも。

「此の御本尊も<sup>ただ</sup>只信心の二字にをさまれり(中略)信心の厚薄によるべきなり」(同 一三八八頁)

とあります。つまり、どんなに御本尊様が立派でも、それをお持ちする信心がなければ、御本尊様の御威光も功德も頂戴することができないということでありまして、ですから最後は「信心の厚薄による」のである、信心こそが肝要であると仰せであります。

では本文に入ります。

まず「<sup>しゅ</sup>先日のまぼり<sup>ざんじ</sup>暫時も身をはなさず<sup>たま</sup>もち給へ」とあります。ここにある「まぼり」とはお守り御本尊様です。ですから仮りに小さなお守り御本尊であっても、そこには仏法の一切が秘められている、御本仏の全生命・御魂魄が秘められているということを知らなければなりません。したがって、この御本尊にはあらゆる宇宙根源の、法界の生命が収まっているということでありまして、

そもそも、この「御本尊」とはどういうことかと言いますと、根本として<sup>そんぎょう</sup>尊敬する対象でありまして、これには三つの意義があると言われております。一つは「<sup>こんぼんそんすう</sup>根本尊崇」、次に「<sup>ほんぬそんぎょう</sup>本有尊形」、それから「本来尊重」という、三つの意義がそこにあるのです。

日寛上人の『観心本尊抄文段』を見ますと、

「<sup>ただ</sup>只是れ<sup>な</sup>根本と<sup>これ</sup>為して之を尊敬す、故に本尊と名づくるなり」(御書文段 二〇四頁)

と御指南くださっております。

また、御本尊を正しく選び、定めなければならないことについては、大聖人様が『本尊問答抄』

に、

「本尊とは勝れたるを用ふべし」(御書 一二七五<sup>〆</sup>)

と仰せです。さらに、このことについて日寛上人の『文底秘沈抄』のなかには、

「夫れ本尊とは所縁の境なり」(六卷抄 四二<sup>〆</sup>)

とあります。「所縁の境」とは、縁とする対境のことです。つまり、主観的な智慧に対して対象となる認識、価値判断の対象となるべきもの、これが境ということになるのです。結論から言うと、最善の境とは三大秘法の御本尊であるとおっしゃっているのです。

続いて、

「境能く智を發し、智亦行を導く。故に境若し正しからざる則んば智行も亦随って正しからず。妙樂大師の謂えること有り『仮使發心眞実ならざる者も正境に縁すれば功德猶多し、若し正境に非ざれば縦い偽妄無けれども亦種と成らず』等云云」(同<sup>〆</sup>)

ともおっしゃっております。これは皆様方もよく聞いていらっしゃると思いますが、たとえ發心が眞実ならざる者も、この正しい御本尊に縁すれば功德が出て来るのです。

これについては、実際には色々なケースがあります。もちろん御本尊の前で悪巧みなどをしてはいけませんが、そうではなくして、例えば子供さんなどが、お父さんやお母さんと一緒に朝夕の勤行をしていく。するとそこに、たとえ子供は御本尊の功德や難しい御法門は解らなくとも、一生懸命にお題目を唱えていくなかに、大きな功德があるということでもあります。

この「發心眞実ならざる」とは、例えばほかにも、病気の方などが当病平癒の御祈念をなさるといふこともあるわけでありまして、あるいは経済的な悩み、人間の色々な煩惱による悩みなど色々なものがありますが、そのようなものを元とした發心でも、この御本尊様に一生懸命にお題目を唱えて、境界を開くように祈っていくなかに、必ず御本尊から大きな功德をいただけるということなのです。

それに対して、その逆が「若し正境に非ざれば縦い偽妄無けれども亦種と成らず」との指南です。文中の「偽妄」とは、いわゆる疑い、妄心、間違いということで、たとえ自分としては一生懸命に信仰していても、対境となる御本尊が正しくなかったならばだめなのです。ここに言う「種」とは仏種のことでありまして、仏様に成るための種を植えることにはならないということでもあります。

これは創価学会の『ニセ本尊』がそうであります。本人達は一生懸命に拝んでいるのかも知れませんが、あのような物をいくら拝んでも功德はないのです。あるいは日蓮宗においても漫荼羅本尊を拝んでいるのかも知れませんが、それは正しい境、正しい御本尊ではないのであります。ですから正しい御本尊に対して信心を立てていくということが一番大切であって、なんでもやればよいというのではないのです。要するに、創価学会の者も、あるいは身延の者達もそうですが、それぞれの御本尊は似ていても、そういう物を「似て非なる物」と言うのです。そこには功德はありません。功德がないどころか、むしろ罪障を作っていくことになってしまうのです。このように、この言葉は非常に大事であります。

この妙楽大師の文に続いて、日寛上人は、

「故に<sup>すべから</sup> 須<sup>えら</sup>く本尊を簡んで以て言行を励むべし」(同 四三<sup>ぎ</sup>)

と仰せです。つまり、御本尊をしっかりと正しく選んでいかなければならないということでもあります。さらに、

「若し諸宗諸門の本尊は処々の文に散在せり、並びに是れ熟脱の本尊にして末法下種の本尊<sup>あら</sup>に非ず」(同<sup>ぎ</sup>)

と、日蓮宗の本尊や創価学会の『ニセ本尊』などは、正しい末法の本尊ではないとおっしゃっているのです。日寛上人の時代には創価学会の『ニセ本尊』などはありませんでしたけれども、ここでは「諸宗諸門の本尊は熟脱の本尊にして、末法下種の本尊ではない。したがって、これを拝んでも功德はない」と明快に仰せなのであります。

そもそも本尊には「人」と「法」があります。人本尊と法本尊と言うように、人と法の二つがあるのです。人本尊とは何かと言いますと、『文底秘沈抄』に、

「人の本尊とは、即ち是れ久遠元初の自受用報身の再誕、末法下種の主師親、本因妙の教主大慈大悲の南無日蓮大聖人は是れなり」(同 四八<sup>ぎ</sup>)

とありますように、日蓮大聖人様のことを指すのであります。これに対して法本尊とは、

「法の本尊とは、即ち是れ事の一念三千無作本有の南無妙法蓮華経の御本尊是れなり」(同 四三<sup>ぎ</sup>)

とあるように、事の一念三千無作本有の南無妙法蓮華経の御本尊を言うのであります。

この人本尊と法本尊は、その体は一つにして、人即法、法即人の関係にあるわけでありまして。このことについては同じく『文底秘沈抄』のなかに、

「人法体一の深旨とは、謂わく、前に明かす所の人法の本尊は其の名殊なりと雖も其の体是れ一なり。所謂人は即ち是れ法、自受用身即一念三千なり、法は即ち是れ人、一念三千即自受用身なり。是れ則ち正が中の正、妙が中の妙なり、即ち是れ行人所修の明鏡なり」(同 五四<sup>ぎ</sup>)

とおっしゃっております。皆さんも勤行のたびに御観念なされている第二座の御観念文にもあるように、一念三千即自受用身、自受用身即一念三千というのが「人法一箇」の御本尊の姿であるということでもあります。

以上、御本尊について少々申し上げましたが、本文のこの所は、御本尊様をわずかの間も身から離さずにお持ちなさいとおっしゃっているのであります。

次に「其の御本尊は正法・像法二時には習へる人だにもなし。ましてかき頭はし奉る事たえたり」とありますように、まさに御本尊様は、大聖人様が御出現せられて初めて頭されたのであります。御本尊様の讃文に、

「仏滅度後二千二百三十余年の間未曾有の大漫荼羅なり」

とありますが、まさに未曾有の大漫荼羅なのであります。

この御本尊は、正法・像法の二時には習える人もいない。まして書き顕し奉る人はだれもいない。ただ御本仏大聖人様が末法に御出現せられて、一念三千即自受用身、自受用身即一念三千の、人法一箇の御本尊を顕されたということなのであります。

『日女御前御返事』のなかにも、これと同じような内容の御文があります。すなわち、  
「抑 <sup>そもそも</sup>此の御本尊は在世五十年の中には八年、八年の間にも涌出品より囑累品まで八品に顕はれ給ふなり。さて滅後には正法・像法・末法の中には、正像二千年にはいまだ本門の本尊と申す名だにもなし、<sup>いか いわ</sup>何に況んや顕はれ給はんをや。又顕はすべき人なし。天台・妙楽・伝教等は内には<sup>かんが</sup>鑑み給へども、故こそあるらめ言には出だし給はず。彼の顔淵が聞きし事、<sup>こころ</sup>意はさとりといへども言に顕はしていはざるが如し。然るに仏滅後二千年過ぎて、末法の始めの五百年に出現せさせ給ふべき由、<sup>よし</sup>経文赫々たり明々たり。天台・妙楽等の解釈分明なり。爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん、<sup>りゅうじゅ てんじん</sup>竜樹・天親等、天台・妙楽等だにも顕はし給はざる大曼荼羅を、末法二百余年の比、はじめて法華弘通のはたじるしとして顕はし奉るなり」(御書 一三八七頁)

この御文も、皆様方はよくお聞きになっているのではないかと思います。

また『妙法曼陀羅供養事』には、

「此の大曼陀羅は仏滅後二千二百二十余年の間、<sup>いちえん ぶだい</sup>一閻浮提の内には未だひろまらせ給はず」(同 六八九頁)

とおっしゃっております。

まさに仏滅後、正・像二時には全く、この御本尊の御出現はなかったわけであります。ただ天台・妙楽等が<sup>ないがんれいねん</sup>内鑑冷然なさり、「内には鑑み給へども、故こそあるらめ言には出だし給はず」と、内心においてはこの末法流布の妙法を御存じであったけれども、未だ時が来ないということで言葉には出さなかったと、こうおっしゃっているのです。ですから、天台・妙楽等の方々は、知ってはおられたということです。有名な、

「末法 <sup>はなは</sup>太だ近きに有り」(同 二五六頁等)

という言葉や、

「遠沾<sup>おんでん</sup>妙道」(同頁等)

という言葉をよく聞くでしょう。御本仏が御出現せられて、この本法たる妙法蓮華経を顕し奉る、そのことを内心は御存じであったから「末法太だ近きに有り」と末法を恋われて、本当に恋しく思われて、あのような言葉が出てきたわけです。ですから、まさに大聖人の御出現によって初めてこの妙法蓮華経の御本尊が御出現するのであり大聖人の御出現がなければ、それはかなわないことなのです。

ですから、先程も言いましたように、御本尊の讃文のなかに「仏滅度後二千二百三十余年の間未曾有の大漫荼羅なり」とありますが、考えてみますと、今その未曾有の大漫荼羅を、大御本尊様を、我々は護持することができているのです。これほどの福運は本当にはないわけです。この功

徳を、我々はもっと深く感じて御奉公に励んでいくということが、仏恩報謝のために必要なことなのではないでしょうか、つまり、広宣流布のための戦いをしていくということが、この御恩徳に報いる道ではないかと思う次第であります。

次に「師子王は前三後一と申して、<sup>蟻</sup>ありの子を取らんとするにも、<sup>また 猛</sup>又たけきものを取らんとする時<sup>勢</sup>も、いきをひを出だす事はたゞ<sup>同</sup>をなじき事なり。日蓮守護たる<sup>ところ</sup>処の御本尊をしたゝめ参らせ候事も師子王にをとるべからず」と、このようにおっしゃっております。

「師子」というのは百獣の王であるライオンのことでありますけれども、師子は非常に慎重な態度をもって相手に向かっていく。つまり、相手の強弱によらず、全力を尽くして戦う姿を示したものでありまして、これは仏様も同じだということなのです。仏様はあらゆる衆生、一切衆生を救済するに当たりまして、相手の機根の上下であるとか、善悪であるとか、そういったものは一切問わず、相手がいかなる者であろうとも差別せず、全魂を込めて救済せられるということをおっしゃっているのです。それはまさに師子の「前三後一」と同じであるということです。

続く「<sup>し し ふんじん しりき</sup>経に云はく『師子奮迅之力』とは是なり」とあるなかの「師子奮迅之力」というのは、法華経の涌出品の御文であります。「師子奮迅」というのはお解りでしょう。猛烈な勢いでもって動くことでありまして、こういった言葉は世間でも使われていると思いますが、元々は仏様が一切衆生を救っていく偉大なる力、つまり仏力・法力のことを、このように「師子奮迅之力」とおっしゃっているのです。

「<sup>こ</sup>又此の曼荼羅<sup>よ</sup>能く能く信じさせ給ふべし」というのはどういうことかという、<sup>む ぎ わっしん</sup>無疑曰信の信心に励めということなのです。「<sup>い</sup>疑い無きを信と曰う」のですから、信心というのは疑ってはいけませんのです。

よく「初信の功德」ということが言われます。ある人が折伏されて御本尊様を頂戴し、そして一生懸命にお題目を唱えていく。「この御本尊は絶対ですよ」ということを聞いて、「そうか」と素直に信じて一生懸命にお題目を唱えてみる。そうすると本当に功德があるのです。疑いがないということは、それほどすばらしいのです。だから我々もこの未曾有の御本尊を拝し奉る時に、無疑曰信、疑いなき信をもって、お題目を唱えて折伏をしていくということが非常に大切なのです。昨日入信した方であっても、その純真な気持ちで、無疑曰信の信心に立っていけば、本当にすべてが解決できるのです。これが御本尊のすばらしい功德なのです。

要するに、御本尊様を疑いなく信じ奉るということが、極めて大切であるということになるわけがあります。

次もまた、同じく『経王殿御返事』であります。

### 経王殿御返事

日蓮がたま<sup>魂</sup>しひをすみ<sup>墨</sup>にそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給へ。仏の<sup>み ころ</sup>御意は法華経なり。

日蓮がたましひは南無妙法蓮華經にすぎたるはなし。(御書六八五<sup>ノ</sup>四行目)

この御文も普段、御住職方からお聞きになっていらっしゃるのではないかと思います。これは、末法の御本仏宗祖大聖人様の御当体が南無妙法蓮華經であって、人法一箇の御本尊であることを顕された御文であります。

脱益だつちやく仏法における仏様というのは、垂迹化他すいじゃくけ たの色相莊嚴しきそうしょうごんの仏であるが故に、たとえ五百塵点じんてん劫本果ごうほん がの釈尊おうぶつしょうしんにしても応仏昇進じ じゅゆうしんの自受用身ほうしようにんれつでありますから、法勝人劣の仏様なのです。これは法が勝れて人が劣るという意味で、根本の法を修して仏様に成ったということですから、法のほうが勝れているわけです。

それに対して、先程言いましたとおり、大聖人様の下種仏法におきましては、久遠元初の御本仏みよう じ ほんぶつ、名字本仏は妙法蓮華經きょう ち みようごうと境智冥合した御当体でありますから、まさに人法一箇であります。このことは『総勘文抄』のなかにもはっきりと、

「釈迦如来五百塵点劫の当初じんてんごう そのかみ、凡夫にて御坐せし時お わ、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座きとに悟りを開きたまひき」(御書 一四一九<sup>ノ</sup>)

と仰せられております。この「釈迦如来五百塵点劫の当初」とは何かと言いますと、これはまさに久遠元初のことです。また「我が身は地水火風空」とは本仏の色法で本地の境妙、それから「知ろしめして」というのは本仏の心法で、これは本地の智妙を顕しているということです。

この境智の二妙は本仏の一身における境智であり、その冥合したところが、いわゆる「即座開悟かい」すなわち事の一念三千南無妙法蓮華經の当体であり、人法一箇であるということです。つまり、久遠元初名字本仏における人法には、法勝人劣などの勝劣はなく、人法一箇で一体不二の境智なのであります。

末法におきまして大聖人が御図顕せられたところの御本尊は、久遠元初即座開悟の内証ないしょうをそのまま顕されたところの、人法一箇の御当体であります。すなわちそれを『草木成仏口決』に、

「一念三千の法門振 濯をふりすゝぎたてたるは大曼荼羅なり」(同 五二三<sup>ノ</sup>)

とおっしゃっているのです。大聖人様御自身の御内証の、事の一念三千の法を顕されたのが大御本尊様であります。また、同じく、

「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」(同 一七七三<sup>ノ</sup>)

とも仰せになっております。これは、久遠の法体を御所持あそばされたる大聖人様の御当体こそが本尊であるということです。

このように末法文底下種の本尊とは、まさしく人法体一なのです。それに対して、そこに勝劣があるというところに、色相莊嚴の仏が劣る理由があるわけです。

次に「信じさせ給へ。仏の御意み こころは法華經なり。日蓮がたましひは南無妙法蓮華經にすぎたるはなし」とおっしゃっておりますが、この御文は、実は種脱相對を明かされているのです。このうち、初めの「仏の御意は法華經なり」という仏とは、まさしく熟脱の釈尊のことを言っているのです。

これは先程言った応仏昇進の自受用身たる釈尊のことで、この脱益仏法の教主たる釈尊は、法華經を説くことを本意、つまり本懐とされたわけでありませぬ。

それに対して、末法下種の教主たる大聖人が、

「今、末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし。但南無妙法蓮華經なるべし」(同 一二一九頁)

と仰せの如く、末法におきましては釈尊の教え、たとえそれが釈尊の本懐とする法華經といえども、成仏の法とはなりえないのです。末法においては、大聖人御図頭の三大秘法の御本尊を信じて、自行化他にわたる題目を唱えていくところのみ、成仏得道がかなえられるということです。だから、熟脱の教主たる釈尊が本意・本懐とするのは法華經であつたけれども、大聖人様の御魂魄、大聖人の御当体は南無妙法蓮華經であると、こういうことになるのです。「法華經」と「南無妙法蓮華經」とは、ここでは種脱相對して述べておられるわけですね。

その意味から、テキストの御文を、この「今、末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし。但南無妙法蓮華經なるべし」という御文と重ね合わせて拝すると、おっしゃっている意味がよく解ります。文上の法華經では成仏をしない、文底秘沈の南無妙法蓮華經でなければ成仏をしない。文底秘沈の南無妙法蓮華經というのは、まさに久遠の本法そのものであります。末法はその久遠の本法、大聖人の唱え出だされた妙法蓮華經のみが成仏得道の大法となることを、この短い御文のなかに種脱相對せられて仰せなのであります。非常にこれは大事なところでありませぬ。

次に、また同じく『經王殿御返事』であります。

### 經王殿御返事

あひかまへて御信心を出だし此の御本尊に祈念せしめ給へ。何事か成就せざるべき。「充満其願、如清涼池」<sup>まん がん にょしょうりょうち</sup>「現世安穩、後生善處」<sup>げん ぜ あんのん ごしょうぜんじょ</sup>疑ひなからん。(御書六八五頁一六行目)

これも非常に大事な御文であります。

先程、我々の信心の上において、無疑曰信の信心がいかに大切かということをおし上げましたけれども、まさにそれと同じであります。御本尊様の絶対的な功德・功力<sup>くくりき</sup>というものを顕された御文であります。

これと同じように、例えば『祈祷抄』のなかにも、

「大地はさゝばはづるゝとも、虚空をつなぐ者はありとも、潮のみちひぬ事はありとも、日は西より出づるとも、法華經の行者の折りのかなはぬ事はあるべからず。法華經の行者を諸の菩薩・人天・八部等、二聖・二天・十羅刹等、千に一も来たりてまぼり給はぬ事侍らば、上は釈迦諸仏を<sup>守</sup>あなづり奉り、下は九界を<sup>とが</sup>たぼらかす失あり。行者は必ず不実なりとも智慧はをろかなりとも身は不浄なりとも戒徳は備へずとも南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給ふべし」(御書 六三



○<sup>〱</sup>)

という御文があります。まさに、この御本尊に「無疑曰信」の信をもって心から祈念すれば、何事も必ず成就するということでもあります。

ただし、それには、

「此の御本尊も只信心の二字にをさまれり。以信得入とは是なり。日蓮が弟子檀那等『正直捨方便』『不受余經一偈』と無二に信ずる故<sup>因</sup>によりて、此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり。たのもしたのもし。如何にも後生をたなみ給ふべし、たしなみ給ふべし。穴賢。南無妙法蓮華經とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり。信心の厚薄によるべきなり」(同 一三八八<sup>〱</sup>)

と仰せのように、我々の強盛なる信心がなければならぬということ、私達はしっかりと覚えていなければなりません。

「御本尊はすばらしい。しかし、なぜ私は功德をいただけないのだ」というのは、本当の信心をしていないからなのです。なぜなのかは、自問自答すればきちんと解るのです。信心というのは自行化他ですから、やはり勤行・唱題と折伏をしっかりと行い、広宣流布の役に立つ御奉公をしていけば必ず功德はあるのです。そう御本仏がおっしゃっているのです。ですから「どうもこのところ、折伏がだめでね」などと言って頭をかいていたのでは、いつまで経っても功德はないのです。やはり信心の厚薄ということが大事なのです。

あくまでも我々の強盛なる信心がなければ、いかに御本尊様が廣大無辺なる妙用<sup>みょうゆう</sup>をお持ちであられても、それを享受<sup>きょうじゅ</sup>することはできません。

そもそも我々の仏道修行のなかで、祈りをかなえ成仏するためには、元々四つの要素があるとされており、それは、皆さんも御存じのように、信力・行力、それから仏力・法力です。我々の信力と我々の行力、それから仏力・法力、この四つの力がそろって初めて成仏できるのです。仏力・法力は既に御本尊様にましますわけですから、あとは我々の信力と行力ということになります。

そこで、もう一度、振り返って考えてみますと、信心の力、信力とは何か。一向にただ御本尊を信じ、この御本尊のほかに仏に成る道は全くないと強盛に信ずることを信力と言うのです。「絶対にこの御本尊以外にはないぞ」という確信が、我々には絶対に必要なのです。「そうかな」などと疑っている人はいないと思えますけれども、それでは絶対にいけません。本当にこの御本尊以外に成仏する道はないという、この強盛な信心・信力がまず第一です。

それから行力というのは、

「日出でぬればとぼしびせんなし。雨のふるに露なにのせんかあるべき」(同 一二一九<sup>〱</sup>)

との如く、先程もありました、

「今、末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし。但南無妙法蓮華經なるべし」(同<sup>〱</sup>)

ということでもあります。つまり、ほかのお経では詮<sup>しる</sup>がない、験<sup>しる</sup>しも何もない。だから、そのような余事を<sup>まじ</sup>を雑えず、ただ南無妙法蓮華經と唱え奉ることを行力と言うのです。

この信力・行力が、我々に課せられた問題です。これが強盛でなければならぬのであります。

また、法力とは何か。法力というのは、三世の諸仏の因果の功德はことごとく本地自行の妙法五字に具足しており、その妙法に具わる広大深遠なる功德、すばらしい絶対の利益のことを法力と言うのです。

そして仏力とは何かと言うと、仏が一切衆生救済の誓願を立てて、その成就を願って示される計り知れない様々な力用のことでもあります。

この四力の関係について『大智度論』には、

「譬えば蓮華の水に在って、若し日光を得ざれば翳死すること疑わざるが如く、衆生の善根も若し仏に値わざれば成ずることを得るに由無し」(御書文段 二二八頁)

とあります。この御文について、日寛上人が『観心本尊抄文段』のなかで釈されて、

「蓮華の『華』は信力、蓮華の『蓮』は行力、『水』は法力、『日』は仏力を表し、まさに蓮華は水によって生じ、我々の信力・行力は法力によって生ずる。もし水がなければ蓮華は生ずることなく、法力がなければ信行を生ずることはできない。故に大御本尊を仰ぎ奉りて、法力を祈るべきである。しかるに、水によって蓮華を生ずることはできても、もし日の光がなければ枯れてしまうように、我々が法力によって信力・行力を生じても、もし仏力を得なければ信行を退転すことは疑いない。蓮華は日の光を得れば必ず栄えるように、仏力を被ってこそ信行を成就し、速やかに菩提を得ることができるのである。我ら衆生が即身成仏の大利益を得るのは、ひとえに妙法蓮華經の大御本尊の法力と、久遠元初自受用身たる御本仏大聖人の仏力によるのである」(同頁取意)

とおっしゃっているのです。

このように、御本尊様は既に法力・仏力をお具えあそばされているわけですから、残るは我々の信力・行力ということになるのであります。まさしく、末法の我々衆生は、ただ一向に三大秘法の御本尊を信じ、この御本尊のほかには全く仏に成る道なしと、強盛に信力を奮い起こして、余事を雑えずに南無妙法蓮華經と唱え、御本尊を受持するところに、御本尊に具わる仏力・法力と冥合して、即身成仏の大利益を得ることができるのです。

像法時代の天台大師は、自己の内なる心、すなわち己心を観ずることによって、そこに十界互具一念三千の生命が具足していることを覚知するという十乘観法の修行法を明かされましたが、これは像法過時の教えであって、末法の衆生の観心とはならないのであります。

大聖人は事の一念三千の南無妙法蓮華經を本尊として顕され、この御本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱える、その受持の一行をもって末法の観心修行とされたのです。「受持即観心」と言われますように、

「信力の故に受け念力の故に持つ」(御書 七七五頁)

という、御本尊を受持する一行をもって末法観心の修行とされたのであります。つまり、事の一念三千人法一箇の大御本尊を受持することが、そのまま悟りを得る観心修行となり、受持即観心の

義を成じて、我々もまた即身成仏の大利益を得ることができるのであります。このことは非常に大事なところであります。

また「**充滿其願、如清涼池**」<sup>じゅうまん ご がん にしようれいよう ち</sup>というのは法華經藥王品の御文であります。すなわち、  
「此の経は能く、大いに一切衆生を饒益して、其の願を充滿せしめたもう。清涼の池の能く一切の諸の渴乏の者に満つるが如し」<sup>よ によやく しようれいよう</sup>(法華經 五三五<sup>じ</sup>)

の略文でありまして、法華經を持つ者は自分の願いがすべてかない、その有り様は、清涼の池がのどの渴いた者を潤すようなものである、ということであります。

次の「**現世安穩、後生善処**」<sup>げん ぜ あんのん ご しよぜんしよ</sup>というのは、法華經の藥草喩品の文でありまして、如来の法力を説いたものであります。また、妙法を信受する衆生の三世にわたる福德を述べたものでありまして、現世では安穩なる境界となり、未来世にも必ず善処に生まれ、妙法を受持することができるとの意であります。

つまり、現世に妙法の弘通に励んだという因は自己の境界を開き、因果の二法によって必ず未来世においても善処、善き処<sup>ところ</sup>に生まれることになるわけです。この善処に生まれるという意味は、信心する家に生まれるなど、すばらしい境界を身につけて生まれてくるということです。

現世には、未来世に受ける果報のすべての因があるのです。今、ここにこうしておるところにすべての原因があるのです。今がしっかりしていれば現世も安穩であるし、未来世も善処に生まれると、こうおっしゃっているのです。だから今、我々は何をするべきかということをよく考えて、信心に励んでいかなければならないのであります。

今、何をするべきかということは既に決まっております。今は宗門を挙げて折伏大前進の時です。本日は五月三十日ですから、本年度も既に六月に近いのですが、約三十の支部が折伏誓願を早々に達成しています。なかには既に目標の二百パーセントを達成している支部もあります。その支部は現在、三百パーセントを目指して頑張っています。それから現在、七十パーセント、八十パーセントまで来ていて、目標達成まであとわずかだという支部もたくさんあります。このように、これから後半にかけましては続々と誓願目標を達成する支部が出てくると思うのです。

折伏誓願は、大中小を問わず、すべての支部が必ず達成することが大事です。そのためには、特に初年度でつまずきますと、どうしてもだめなのです。「最後のほうで頑張るさ」と言っている、そのような人が頑張ったためしはありません。今、本当にやらなければならないのです。まさに「今こそやらなければならない」というものがあるのではないのでしょうか。

現在、日本の国も世界も混沌<sup>こんとん</sup>として、色々な問題を抱えているようです。政治・経済の問題、あるいは先日の韓国と北朝鮮の軍事問題等、色々な問題が起きているわけです。そのようななか、世界の平和を本当に願っていくためには、折伏しかないのです。なにしろ、世法の根本は仏法であります。つまり、仏法は体<sup>たい</sup>で、世法は影なのだから、折伏をしっかりやっっていかなければ世界平和は実現しないのです。日本の国も安泰になりません。

やはり国ということは、我々の生活のなかでも非常に大切な要素を持っているわけです。大聖

人様は『立正安国論』のなかで、

「汝すべから須あく一身の安堵あんどを思はまゞ先せいひつづ四表の静謐いのを祈るべきものか」(御書 二四九㊦)

とおっしゃっております。我々が本当に「一身の安堵」つまり自分自身の幸せを思うならば、まず「四表の静謐」を祈れとおっしゃっているのです。「四表」というのは東西南北、つまり世の中のことです。やはり国というものを安泰にしていかなければだめなのです。そこで「先づ四表の静謐を祈るべきものか」と、大聖人はおっしゃっているのです。

皆さんのなかには御年輩の方もいらっしゃいますが、日本も半世紀前、戦争を始めて本当に悲惨な目に遭いました。そんな時代には、若い者達は赤紙一枚で兵隊に取られてしまうのです。皆さんのお父さんや、あるいは御自身がという方もおありでしょう。そのような時代には、信教の自由や個人の自由などというものは、まさに蹂躪じゅうりんされ尽くしてしまうのです。

もしも、再びそういう国家になったらどうしますか。そうならないためには、大聖人がおっしゃるとおり、「立正安国」なのです。つまり「一身の安堵を思はゞ先づ四表の静謐を祈るべきものか」、国家の安全、世界の安寧あんねいを祈っていかなければなりません。国家の安全のためにはどうするかというと、はっきり言って折伏しかないのです。折伏以外に、国家の安泰を祈る道はないのです。

大聖人は既に『立正安国論』のなかで、

「国中の謗法たを断つべし」(同 二四七㊦)

とはっきりおっしゃっているのです。だから、我々の行じている折伏というのは、世間・出世間ともに、素晴らしいことをしているのです。世の中の人々のために、世界の人々のために、もちろん自分自身のためにも最高のことを行っているのです。大聖人の教えのなかにはそういう思想があるのです。世の中を救っていく、世界を救っていく、そういう思想を、我々は心の中でしっかりと握りしめて折伏をしていくことが大切ではないかと思えます。このことを是非、お忘れにならないようにしていただきたいと思えます。

次に『妙法曼陀羅供養事』です。

### 妙法曼陀羅供養事

此の曼陀羅まんだらは文字は五字七字にて候へども、三世諸仏おんしの御師にょし、一切の女人にょにんの成仏いんもんの印文なり。冥途めいどにはともしびとなり、死出しでの山やまにては良馬りょうまとなり、天あまには日月にちげつの如し、地ちには須弥しゆみ山の如し。生死海せんじの船なり。成仏得道の導師だうしなり。此の大曼陀羅は仏滅後二千二百二十余年の間、一閻浮提いちえんぶだいの内には未だひろまらせ給はず。病やまいによりて薬あり。軽病けいびんには凡薬ぼんをほどこし、重病じゆうびんには仙薬せんやくをあたうべし。(御書六八九㊦一三行目)

初めに「此の曼陀羅まんだらは文字は五字七字にて候へども、三世諸仏おんしの御師にょし」とあります。この大漫荼羅御本尊は、文字はわずか五字、七字であるけれども、三世諸仏の御師である、つまり妙法蓮

華経こそ法華経の肝心であり、一切諸仏能生の根源にして、まさしく師匠である。三世諸仏は南無妙法蓮華経を師として仏に成ったということでもあります。

そして「一切の女人の成仏の印文なり」とおっしゃっていますが、「印文」というのは責任を取るためにはんこを押すことを言うのですけれども、ここでは保証するという意味を含めて、その印とか証しという意味です。

この女人成仏は、実は爾前権経ではずっと説かれておらず、法華経に至って初めて明かされたのであります。『唱法華題目抄』のなかにも、

「諸経は悪人・愚者・鈍者・女人・根欠等の者を救ふ秘術をば未だ説き頭はさずとおぼしめせ。法華経の一切経に勝れ候故は但此の事に侍り」(御書 二二六)

と仰せであります。法華経以外の諸経、例えば阿弥陀経などではいわゆる悪人、愚者とか鈍者、女の人、それから成仏の機根が欠けている人という意味の根欠、そういった者達を救う秘術が全くなかったのです。しかし法華経は、いかなる悪人や愚者等であろうとも、すべてを成仏させることができるのです。これが爾前権経と法華経との大きな違いだと仰せなのです。

また『開目抄』のなかには、

「竜女が成仏、此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華経已前の諸の小乗経には、女人の成仏をゆるさず。諸の大乗経には、成仏往生をゆるすやうなれど、或は改転の成仏にして、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり」(同 五六三)

とおっしゃっております。つまり、爾前権経と法華経とを比較いたしまして、爾前権経の教えでは女人の成仏は許されなかったとおっしゃっているのです。

法華経以前の小乗経では女人の成仏を全く説きません。大乘経に至ると一往、成仏往生を説くだけでも、それはいわゆる「改転の成仏」であり、一念三千の成仏ではないとおっしゃっているのです。

この改転の成仏というのは、即身成仏に対する言葉で、女の人も一度、男に生まれ変わってから成仏するということでもあります。爾前経においては、女人は罪障が深いものとされてきましたので、いったん男に生まれ変わってから成仏をすると説かれているのであります。それに対し、法華経はそれとは違い、即身成仏、一念三千の成仏だと仰せです。つまり、一念三千の成仏というのは女人も悪人も共に、その身そのまま成仏することをおっしゃっているわけです。

爾前権経では十界互具が説かれませんが、だから、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界が各別です。とりわけ二乗に対しては、爾前経では差別が説かれ、大乘経において成仏が説かれても改転の成仏であり、即身成仏ではなかったのです。しかし、法華経では舍利弗などの二乗の成仏が許され、さらに地獄界の提婆達多、あるいは畜生界の女人である竜女の成仏が説かれているのです。すなわち、法華経において十界すべての成仏が明かされ、一念三千の妙理が示されるに及んで、まさしく即身成仏が明かされたのであります。

今時末法においては、真の事の一念三千である日蓮大聖人の仏法によって初めて、成仏がか

なうのであります。この御文のように、悪人、愚者、鈍者、女人、根欠の者など一切、相手を選ばず、必ず成仏することができるかと説くのが法華經の教え、大聖人様の御法門です。すべてが必ず、この妙法によって成仏することができるのです。

そして、この御文の続きに、

「<sup>こいちれいしよ</sup>挙一例諸と申して、竜女が成仏は、末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし」(同 <sup>べー</sup>)

とあります。提婆達多品で竜女の成仏が説かれました。竜女とは畜生の身であり、女人です。これが即身成仏をするわけでありますから、これこそ「末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし」つまり、成仏の道が開かれた証しであるとおっしゃっているのであります。

この御文の直前に「<sup>う みよう む じつ</sup>有名無実」とありますが、これは「名は有るけれども実が無い」ということであります。つまり、法華經迹門の一念三千・二乗作仏は、本門が説かれて初めて真の一念三千・二乗作仏となるわけですから、いわゆる理の上では説かれていても、<sup>じ</sup>事の上、実の上では説かれていないということです。

迹門の一念三千は、法華經方便品の十如实相に基づいて立てられたものでありますけれども、迹門の教主は<sup>し じょうしやうがく</sup>始成正覚の仏であって、未だ仏様の本因・本果・本国土の三妙が明かされていないのです。そのため、一切衆生の十界互具一念三千の当体を成就する可能性が理の上で示されてはありましたけれども、事の上では示されていなかったのであります。それが、法華經本門に至つて因果国の三妙が説かれ、初めて事の一念三千となったのであります。

しかし、さらにもう一つ奥に入って文底の法門から見ると、法華經本門といえども、これは所詮、法華經の文上の一念三千であって、結局、迹門の一念三千と同じく、末法の衆生を救う法とはならないのです。このことは『<sup>城</sup>本因妙抄』のなかに、

「一代<sup>城</sup>応仏のいきをひかえたる方は、理の上の法相なれば、一部共に理の一念三千、迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる事を、脱益の文の上と申すなり」(同 一六八四<sup>城</sup>)

と示されてあります。

即身成仏とか一念三千ということについても、爾前権經と法華經とでは違うのです。また、法華經のなかでも迹門と本門とでは相違があり、迹門では理の一念三千が説かれ、本門では事の一念三千が説かれるのです。しかし、これも文底下種の仏法の上から言いますと、法華經文上の迹門も本門も、共に理の一念三千であるということになるのです。だから有名無実、名はあっても実はないと言われるのでありまして、あくまでも大聖人様の文底仏法の上からの成仏でなければならぬのです。

このようにお話すると、少し疑問に思う方もいらっしゃるかと思います。提婆達多品において竜女が即身成仏をしたと申しましたが、その提婆達多品を拝しますと、竜女は即座に男子に生まれ変わって成仏をしたと説かれているのです。そうなると、即身成仏とは違うのではないかと言う方がいると思います。

これには、実は大事な意義があるのです。今も言ったとおり、竜女は男子に生まれ変わって成仏したと説かれているわけでありますが、これは「<sup>へんじょうなん し</sup>変成男子」と言うのです。この変成男子の相というのは、釈尊の熟益・脱益の化導のなかにおける、八歳の竜女の成仏の相であります。したがって、これは脱益の成仏の相なのです。

これに対して下種の成仏の相から拝すれば、竜女が宝珠を釈尊に奉り、釈尊がそれを受けられた時に、既に八歳の竜女はその身そのままに成仏をされているという「内証成仏」がそこにあるのです。つまり、八歳の竜女の成仏は改転の成仏ではなくして、その身そのままに即身成仏したことが内証成仏の上に顕されているわけなのです。

<sup>こんにち</sup>今日に約して言うならば、妙法蓮華經を受持するところの信心によって我が身が妙法の当体と開き、この父母所生の煩惱果縛<sup>かぼく</sup>の身がそのまま真の仏と成るのであります。これこそ一代仏教全体のなかの、真の成仏の相であると言えるわけであり、天台大師や妙楽大師の方々も、經文にはそのように説かれていても、竜女の即身成仏と仰せられている所以<sup>ゆえん</sup>であります。

よって、大聖人様は「竜女が成仏、此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華經已前の諸の小乗經には、女人の成仏をゆるさず。諸の大乗經には、成仏往生をゆるすやうなれども、或は改転の成仏にして、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例諸と申して、竜女が成仏は、末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし」と仰せられているのであります。

つまり、この文底下種の仏法によって、いかなる者も成仏できるのです。そのなかに、竜女をはじめとする女人の即身成仏が含まれているわけであります。經文の上では「変成男子」となっているけれども、そこには既に内証成仏せられたことが示されているということでもあります。

また、女人の成仏については『月水御書』のなかに、  
「日月は東より出でさせ給はぬ事はありとも、大地は反覆<sup>はんぷく</sup>する事はありとも、大海の潮はみちひぬ事はありとも、<sup>われ</sup>破たる石は合ふとも、<sup>こうが</sup>江河の水は大海に入らずとも、法華經を信じたる女人の、世間の罪に引かれて悪道に墮<sup>お</sup>つる事はあるべからず」(同 三〇二頁)  
とも仰せでありますから、女の方はどうぞ安心してください。

この御本尊を受持していけば、絶対に地獄に墮ちることはないとおっしゃいます。たとえ大地がひっくり返るようなことがあったとしても、あるいは大海の潮がなくなってしまうたり、<sup>わ</sup>破れた石が合わさることがあったり、江河の水が大海に入らないというようなことがあったとしても、この御本尊をしっかりと受持していけば、悪道や地獄に墮ちることは絶対にないとおっしゃっているのです。

それなら男は安心かと言いますと、もちろん謗法を犯してはいけません。ここが大事なところでもあります。しっかりと自分に厳しくしていくことが大事です。

テキストに戻りまして、「冥途<sup>めいど</sup>にはともしびとなり、死出<sup>しで</sup>の山にては良馬となり、天には日月の如し、地<sup>しゅみせん</sup>には須弥山の如し。生死海の船なり。成仏得道の導師なり」とあります。「冥途にはともしび

となり」とある「冥」は暗いということで、真っ暗で何も見えない状態のことです。そのようなときには、まさしく灯ともとなって導いてくださると仰せです。また「死出の山にては良馬となり」とは、死出の山においては良い馬となり、背に乗せて山を越していただけるということです。そして「天には日月の如し」、あたかも日月のように世界を照らし、さらに「地には須弥山の如し」とは、地上にあっては須弥山のように世界の中心をなしていることをおっしゃっているわけです。「生死海の船なり」、生死の迷いの海を渡って、涅槃の彼岸へ至らしめる船であり、「成仏得道の導師なり」、一切衆生をして成仏得道せしめる大導師である。この御本尊は、たとえ文字は五字、七字であっても、そのような大きな功德があるということなのです。

「此の大曼陀羅は仏滅後二千二百二十余年の間、一閻浮提の内には未だひろまらせ給はず。病やまいによりて薬あり。軽病ぼんには凡薬をほどこし、重病せんには仙薬をあたうべし」とあります。ここに「重病には仙薬をあたうべし」とありますが、末法ほんみうぜんの本未有善の衆生は、在世脱益ほんいうぜんの本已有善の衆生のように、爾前権経はもとより文上の法華経でも成仏することはできません。本因下種の妙法によって初めて救われる身なのです。このことは『高橋入道殿御返事』に、

「我が滅後五百年が間は迦葉・阿難等に小乗経の薬をもって一切衆生にあたへよ。次の五百年が間は文殊師利菩薩・弥勒菩薩・竜樹菩薩・天親菩薩等、華嚴経・大日経・般若経等の薬を一切衆生にさづけよ。我が滅後一千年すぎて像法の時には薬王菩薩・観世音菩薩等、法華経の題目を除いて余の法門の薬を一切衆生にさづけよ」(同 八八七頁)

と仰せられるように、それぞれの時代によっていかなる法が説かれ、衆生のための薬になったかということが、仏法では決まっているのです。正法時代、像法時代には、これらの方々が時に合った教えを説き、そしてまた、その薬を授けているのです。しかし、このあとに、

「末法に入りなば迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、薬王・観音等のゆづられしところの小乗経・大乘経並びに法華経は、文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず。所謂病は重し薬はあさし。其の時上行菩薩出現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし」(同 べー)

とあるように、末法には外用上行菩薩、内証久遠元初の御本仏である日蓮大聖人様が御出現せられて、妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生に授けるのであると、このように明言せられているわけです。

だから、この「時」というものを考え違いしてしまっははいけません。その時々によって弘めるべき論師・人師、そしてまた弘められるべき法というものが、仏法では決まっているのです。これを違えてしまうとだめなのです。

末法はまさに大聖人様の仏法、いわゆる外用上行菩薩、内証久遠元初の御本仏が御出現せられて、妙法蓮華経という薬を一切衆生に授ける。一切衆生はその薬をいただいて成仏をしていくということが、明らかに説かれているのであります。このことが非常に大事なのです。

したがって『四条金吾殿御返事』には、



「真実一切衆生色心の留難を止むる秘術は唯南無妙法蓮華經なり」(同 一一九四㊦)  
と、まさに一切衆生の色心の様々な留難をとどめる秘術は、ただ南無妙法蓮華經だけであるとい  
うことをおっしゃっておられます。『撰時抄』などを拝しますと、この「時」ということがはっきりと説か  
れているわけでありますから、これを勘違いしてしまいますと、大変なことになってしまうのでありま  
す。

この次の『当体義抄』の御文は、短いのですけれども、この御文だけでも一日かかってしまうぐ  
らいの内容があります。

### 当体義抄

所詮妙法蓮華の当体とは、法華經を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり。

(御書六九四㊦九行目)

この「所詮妙法蓮華の当体とは、法華經を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり  
り」という御文は非常に大事であります、時間の関係上、簡単に申し上げます。

「父母所生の肉身」というのは、我々が父母から受けた、ありのままの人間の姿のことです。そ  
のありのままの人間が、妙法を信じたときには、尊極なる妙法蓮華經の当体と頭れるということをお  
っしゃっているのです。これは非常に大事な御法門です。

我々凡夫というものは煩惱の塊であり、貪・瞋・癡の塊です。「貪」というのはむさぼり、「瞋」と  
いうのはいかり、「癡」はおろかです。それらの塊のような存在であっても、この妙法蓮華經を唱え  
ることによって尊極の妙法蓮華經の当体となるのです。このことをお示しになっているわけであり  
まして、『阿仏房御書』のなかにも、

「末法に入って法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり」(御書 七九二㊦)

とあり、南無妙法蓮華經を持つ我々の姿のほかには宝塔はないと仰せです。さらに続いて、

「若し然れば貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經ととなふるものは、我が身宝塔にして、我  
が身又多宝如来なり」(同㊦)

ともおっしゃっております。この「宝塔」については、続く御文に、

「妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經なり」(同  
㊦)

と、このようにはっきりと仰せでありまして、宝塔とはまさしく南無妙法蓮華經であるのです。だから、  
どんな人でもこの妙法を唱えていくと尊極なる妙法蓮華經の当体となるという、まさに即身成  
仏の大法を示された御文なのです。

この御文と似た御文が『当体義抄』のなかにありますので、それを拝読してみたいと思います。  
これは皆さん方もよく知っている御文です。

「正直に方便を捨てただ但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱・業・苦の三道、  
法身・般若・解脱ほっしん げだつの三徳と転じて、三觀・三諦即一心さんがん さんたいに顕はれ、其の人の所住の処は常寂光  
土どなり。能居・所居・身土・色心のうご しょご しんど くだいく ゆう、俱体俱用の無作三身、本門寿量の当体蓮華の仏とは、日蓮  
が弟子檀那等の中の事なり。是即ち法華これの当体、自在神力じんりきの顕はす所の功能くのうなり。敢へて之  
を疑ふべからず、之を疑ふべからず」(同 六九四頁)

皆さん方はこの御文をよく聞いていらっしゃるでしょうが、このなかにもありますとおり、南無妙法蓮華經と唱えるところに、煩惱・業・苦の三道が、法身・般若・解説の三徳に転ずるのです。これを三道即三徳と言いますが、妙法を唱えることによって三道即三徳と転ずることができるのです。

我々の不幸の様々な原因を見てみると、だいたいがこの煩惱・業・苦の三道によるものです。要するに、煩惱が起きると、その煩惱が色々な悪業の因縁を作り、そして苦しむのです。そして三輪といって、煩惱・業・苦の三つをぐるぐると繰り返すのです。これが凡夫の姿なのです。だから、いつまで経ってもこの三輪から抜け出せない。もがいても、もがいても、また同じように煩惱が業を作り、悪業の因縁が苦しみになり苦しみがまた煩惱を作るのを繰り返すのです。

これを打ち破っていくのが南無妙法蓮華經であり三道が法身・般若・解脱の三徳に転ずるのです。この三徳というのは、仏様に具わる三つの徳であり、お題目をしっかりと唱えていけば、この三徳が我々凡夫にも具わるとおっしゃっているのです。そこに大聖人様の仏法のすばらしさが存するわけであります。是非、これから先、このことをしっかりと心肝に染めて信心に励んでいただきたいと思います。

特に、信心というのは折伏です。今、宗門を挙げて折伏に大前進する時に来ておりますから、平成二十七年、三十三年に向かつて、一人ひとりが、御隠尊日顕上人仰せの「一年に一人が一人の折伏を」というお言葉を本当に実行して御覧なさい。

まず今日、来られた方々が折伏をやっていきましょう。そうしますと、まず自分が変わり、周りが変わり、世間が変わり日本が変わり、世界が変わるのです。その原点は折伏なので、折伏以外に本当の幸せを築く道はないのです。

先程の御文に示されるように、我々は煩惱・業・苦の塊ですが、法身・般若・解脱の三徳という仏様の具える三つの徳を、一人ひとり得ることができるのです。なんと幸せなことではありませんか。この幸せを求めて、皆さんには折伏ぎやっけ逆化の戦いに臨んでいただきたい。

朝夕ちようせきの勤行をしっかりとし、唱題をして、その功德と歓喜をもって折伏に打って出ていく。また、折伏の功德によって唱題をし、唱題の功德によって折伏をしていく。そういった良い循環をしていくことが、今年の大きなテーマではないかと思います。

どうぞ各位には、これからますます御精進くださることをお祈りいたしまして、本日の話を終了いたします。